
日本臨床環境医学会10周年を迎えて

10周年記念をお祝いして

理事長

石川 哲*



日本臨床環境医学会が10周年を迎えることになった。

例えば旭川市において第1回学会が開催されてから、早や10年を経過したことになる。当時微量環境化学物質に基づく「化学物質過敏症」、や「シックハウス症候群」という言葉は一般にも、医師達、中毒研究者にも殆どなじみが無く市民権は得られにくい時代であった。幸い、旭川医科大学、旭川市、北里大学医学部の方々の努力が中心となり学会の基礎作りが進展した。環境問題特に「臨床的に環境問題と関係がある患者症例について自由に討議をし発表できる学会が欲しい」という要望はその後日増しに高まって来た昨今である。

当時から本学会設立に努力して頂いた、田邊等理事、安孫子保理事、宮田幹夫事務局長、秘書の蓑川慶子さん、三菱総研の方々には特にお世話になった。

時代の流れと共に、化学物質の規制問題はホルムアルデヒドに始まり、トルエン、キシレン、クロルピリフォス、パラジクロロベンゼン、フタル酸エステル等に拡大し、少なくとも化学物質過敏症をおこさぬ様な家やビルを建設すべきであるという風潮が高まって行ったのはこの学会から発信されたデータに負うところ極めて大である。旭川市には患者治療の基本とも言うべき保養施設が木の城大雪〔冬総研〕との協力で建設され、東京では、北里研究所病院内に臨床環境センターが設立され、患者の診療治療に利用されるようになったこと、クリーンルームを持つ実験用動物室が文部省フロンティア研究の援助で北里大学医学部・医療衛生学部内に建設されたこと、科技厅生活者ニーズ研究でシックハウス症候群対策が積極的に行われるようになったことなど時代は大きな変革を遂げた。

本学会の対社会へ果たした業績は極めて大であると考えている。これらの目的達成には本学会会員または関連する諸団体の方々に御負担、御援助を頂いた。こうした力がなければ、この学会はここまで育つことは無かったと思う。幸い米国アカデミー環境医学会でも本会の活動を高く評価してくれている。

これまでの会員の方々に厚く御礼を申し上げますと共に本学会が将来益々発展されることを心からお祈りして止まない。

* 勸北里研究所病院臨床環境医学センター長